

RPPC

News Letter No.9



人新世を生き抜くレジリエンス

— 絶え間ない共同性の創出という可能性—

村尾るみこ

(立命館グローバル・イノベーション研究機構・助教)

昨今の世界情勢のなか、紛争だけでなく、気候変動、自然災害によって、人類の生存が危ぶまれる事態が絶えません。私は現代の人類社会のレジリエンスが状況依存的事実であることを前提に、アフリカを中心として、人の移動、農業、開発や女性に関連するテーマについて、地域研究と人類学を専門に研究してきました。特に、実務家や政府関係者などを含む多様なアクターとともに研究をすすめており、日本ではNPO 法人の活動として、現地の人びとが直

面する社会課題とその解題にむけた現地の情報発信をおこなっているほか、アフリカや海外にルーツを有する人びとのネットワーク形成を中心とした社会活動もとりくんできました。さらに私は自分の社会活動の経験を研究に活かし、人新世にある現在、かつての時代を共にこえてきた多様な立場の人間集団が「共生」し、レジリエントな社会を共創する可能性を追究しています。

アフリカは人類発祥の地です。世界では農業を基



写真1 労働力と交換され分配される食料（ザンビア）（写真はすべて筆者が撮影）



写真2 難民定住地の調査の様子（ザンビア）

盤とした文明が栄え、やがて工業化がすすみましたが、サブ・サハラアフリカ地域は集約的な農業が面的に拡大しないまま近代国家が成立しました。今日アフリカの多くの国は、地下資源を重要な収入源にしています。そしてその国民の多くは農業や牧畜などに依存した生計を営んでいます。彼らは、紛争や干ばつ、自然災害、慢性的な貧困状態によって食料へのアクセスが途絶えがちと報道されます。しかし、実際にアフリカに住む人びとはどのように日常を生活しているのか。そう考えた私は南部アフリカのザンビアやアンゴラで長期間フィールドワークをおこない、現地に生きる人びとの生存戦略に注目してきました。

アフリカで調査を開始したころは、ザンビア西部のカラハリ砂層に発達した林に焼畑を造成するンブンダとよばれる農民に関心がありました。現地でンブンダによく話を聞いてみると、ンブンダは農民であると同時に難民でした。ザンビアの隣国アンゴラはアフリカのなかでも紛争が長期化した国の一つです。アンゴラの隣国であるザンビアの農村には、アンゴラから逃れてきた難民が多く住んでいました。ンブンダは国家による開発事業や援助が行き届かないなか、先住のエスニック集団の首長による慣習的



写真3 村のある集落の風景（アンゴラ）

な統治のもとで、カラハリ砂層の堆積する痩せた土地を排他的に分配されていました。そしてその痩せた厳しい環境で、自律的に農業技術の改良や農産物の商品化をおこない、豊かな生活を再建することに成功していました。ンブンダの成功は、アフリカの農民にとって最も重要な、共食や農産物の販売を分業する親族集団の再編と大きく関係しています。ンブンダは、親族集団の結集原理を、親族だけでなく知人も含むものへと変化させ、土地、労働力や食料を集団的に獲得して避難先でのザンビアの生活を生き抜いていました。それは、歴史的に世界の政治経済とつながりながらも、日本など先進国で見られるような、法の下での個人の自立や権利・責任とせめぎあい培われる文化的な営みとは異なります。ンブンダの生活の営みは、日常のなかで農業生産や消費のための資源を共有する集団を再編成し新たな共同性を絶え間なく創出する、レジリエントな文化的営みなのです。

立命館大学環太平洋文明研究センター

News Letter No. 9

発行日 2025年5月24日

発行所 立命館大学環太平洋文明研究センター

〒603-8577 京都市北区等持院北町 65-1

E-mail r-ppc@st.ritsumei.ac.jp

URL <http://www.ritsumei.ac.jp/research/rcppc/>

編集 中村 大（共通教育推進機構・教授）